

## 周作人と中国新文学

Zhou Zuo Ren and China 's new literature

湯 麗 敏  
TANG Limin

周作人は魯迅の弟で、1885年周家の次男として生まれた。少年時代に兄の魯迅と一緒に「三味書屋」で勉強したが、家庭の事情で勉強をやめ、一緒に故郷で避難生活を送った。その後、魯迅について、南京江南水師学堂に就学し、さらに自らの学問をより深めるために日本に渡った。その当時中国社会は一つの大きな変革期を迎えており、時代の風潮の影響の下で民主主義と民族主義の思想の影響を受けた彼は、人々の「性格を変え、社会を改造する」という目的を達するために、文学を革命の武器とすることを決意した。最初は航行術を学んだり、又彼は途中で工学部土木科に変わったりしたが、ついには文学芸術に方向転換して以来文学と生涯通じて離れることはなかった。

日本に留学していた頃の周作人は幅広く外国の学術文化にも接し、西洋の文芸思想の中から、そして個性主義と人道主義の思想の影響を強く受けた。五・四新文化運動において周作人は、魯迅とともに運動の先頭に立った驍将であった。彼ら兄弟は当時の文壇ではほぼ同じくして有名であった。周作人は文学革命理論の確立に多大な貢献をしたばかりではなく、散文、詩、歌、児童文学、大衆文学、外国文学の創作、研究などの面においても創造性のある仕事に取り組み、大きな実績を上げた。五・四新文化運動中、文学革命の実績といえば、まずあげられるのは小説だと言われているが、最も成績がよく、そして注目を集めたのはなんと言っても散文だと言われている。そして周作人はその中で傑出した一人であった。

散文大師といわれたほどの周作人は、その一生に三千篇余りの散文、四十余りの散文集を發表した。特に一九三七年までに出版された散文集には『自己的園地』、『雨天的書』、『澤鴻集』、『談龍集』、『談虎集』、『永白集』、『看雲集』、『苦草隨筆』、『苦竹雜記』、『風雨談』、『瓜豆集』など、何回も再版され、いまとなっても多くの読者に愛読される名作が名を連ね、それらの作品は当時の文壇に漂っていた陳腐、晦渋、重苦しい風調を一掃し、自由で新鮮なる空気を吹き込んだ。

飾り気のない落ち着いた格調は周作人の著した散文の特徴の一つである。彼は晩年に書いた『知堂回想録』で文学作品創作に触れ、「わたしは文章を書く場合、普段一番留意したのは次の二つの書き方である。一つは平明で、こむずかしいところがなく、主題をきちんと言い表していること。もう一つは論説が深い意味を持ち言葉が明確で、まるで爪を肉に食いこませるように、端的に事柄の核心を突っ込んで言うもの」と述べた。物事を述べるのであろうが、景色を描写するのであろうが、周作人の文体は終始郁達夫が評価したことを借りて、述べるならば「緩急、自在、筆の走るままに任せ、初めて読んだときにはむしろ散漫としていて、うるさい感じがする。仔細に読んでいくと、彼の放談の、一語一語に重みがあり、一篇の中の一語を減じても、一語の中の一語を換えてもその文章がならないのを覚え、読み終わってから、もう一度初めから読み返したくなる」と

いう感じは、一度でも、その文に触れた者であったら同じ気持ちを抱くものだと思う。

例えば、一九二六年に書いた『烏蓬船』という作品では、周作人は自分の古里を訪ねたがる友人に故郷の有名な風物を紹介したり、遊覧の道筋から水郷の風景の観賞方法までひとつひとつ詳細に教えてやっている。一見淡々と述べているようだが、平易な話の中に真情があり、読者がその場に身を置かれたかのような臨場感も感じ取れる。この作品の中にこんな一節がある。

「船に坐って山遊びの気持ちを持ちながら周りの景色を觀賞するとよい。そうすると両側にそびえたつ山々、岸にいる鳥、川辺の菱や浮き草、漁夫の家、さまざまな橋などが視界にとびこんでくる。眠い時、船の中で横になり、随筆でも読んだり、あるいはお茶を注いでゆっくりと味わったりする。……夜船に横たわって休む際、水の音、櫓の音、行き来をしている船員どうしの交わす挨拶声や村の犬の吠え声と鶏の鳴き声などを聞くのも、大変おもしろいことである。」など。

彼の散文を読むと、その淡々とした風格により、まるで友人と話をしているような感じを受ける。読者はその平淡、温和な記述に真意を感じ、感銘を受ける。周作人の散文と読者との関係はまるで友人同士のようで、それまでの中国では感じることのできない、平等と親切さが直接読者に伝わっていく。

趣味と常識、人情に富んでいるのは彼の作品のもう一つの特徴である。「私は趣味を重んじ、これは美であり、善でもあると考え、無趣味なことは大悪事だと考えている。ここで言った趣味は雅、素朴、渋さ、温和、清朗、通達、中庸、選択など沢山の内容が含まれているが、これらのものと反対なものは無趣味なものだと見なす。」と、周作人は『笠翁と随園』で語っている。周作人は無味単調な文章を嫌い、文章作成の際には、文に必ず趣味の要素を書き込み、ユーモアに物事を表現した。周作人が求めていた「趣味」とは人生に向き合う姿勢と美の追求との合体であり、人生価値を評価することと美を求めることとの統一でもあった。そして、人の風格と作品の風格との統一だということだった。周作人が書いた散文は三千篇あまりに上り、その内容は政治、生活、人情、自然、民俗など実に幅広く及んでいる。中国の物事を主に取り上げるのはもちろん、外国のものもたくさん書いたが、中でも日本に関しては、数多く書いている。例えば、『日本の人情美』、『談日本文化書』、『日本近三十年小説之発達』、『日本の衣食住』、『日本与中国』、『日本の落語』、『隅田川兩岸一覽』、『東京散策記』、『両国煙火』、『日本的詩歌』、『森鷗外博士』、『有島武郎』、『与謝野先生記念』などである。これらの文章は周作人が日本と親密な関係にのっとったものを語っている。そして散文以外に雑文、評論、伝記、詩歌などがある。

周作人は豊富な知識を有した学者であった。国内国外を問わぬ豊かな生活経験がばかりでなく、漢字、詩作古書の学などにも造詣が深く、言葉も日本、スペイン、ロシア、イギリス、ギリシャなどなど何ヶ国語も堪能に操ることができた。古典文学や外国文学の作品にも精通して、自らの作品にも古典作品を多く引用している。また巧みに反語を使うので、反語の名人だという評価が高かった。それゆえに文章がユーモアたっぷり、読むと優しさとおもしろさを感じられる。「読み終わるともう一度最初から読み始めたいと思う」と郁達夫は語っている。また奥野信太郎は「その豊かな学識と、聡明な性情と、上品な趣味とのために、奇矯に走ることから免れ得て、表面は止水の静寂に満ちているが、その止水の底、深き淵をなし、蛟龍眼を怒らせて住んでいることに思い及ばなくてはならない。」と感想を述べた。激しい熱情を水の如き文章の行と行、言葉と言葉の間に潜ませた表現力は実に見事で最も感嘆すべき点であろう。

「五四」新文化運動中の周作人は熱血青年であり、文学革命を叫ぶ改革者であった。彼は中国封建社会の人権無視、個性抹殺がはびこる暗黒の現実に真っ向から対決姿勢を取り、最初に「人的文学」を打ち出した。

「人的文学」は一九一八年十二月（『新青年』五巻六号）に発表されている。文章は非人間的文学を排斥し、人道主義的、人類愛の文学を提唱したもので、新文学運動のほとんど唯一の指導理念として、新文化の進むべき目標を明確に指示した点で画期的な論説である。

胡適は「周先生はわれわれの時代において、提唱すべきさまざまな文学の内容の一つの中心理念にまとめ、

これを彼は「人的文学」と呼んだ。」(建設理論集導言・中国新文学大系)と評価した。新文学が求めるのは「個人は人類の一分子の資格を持って、芸術の方法で個人の感情を表現し、人類の意志を代表して、人間生活の幸福に影響を与える人道主義的文学或いは人生的文学である。これは「人的文学」の内容を一層豊富にさせた。周作人の「人的文学」の理念を見てみると、これは主に霊肉一致の素朴な進化観、個人主義的人間本位主義、人類愛の人道主義、の三つの内容からなっていることがわかる。この三つの内容は相互関係、互いに補いあうことによって完備的な指導理念になった。

「人的文学」の理念の基礎は人間の本質を認識することにある。周作人は「人」と言う概念を「動物から進化した人類」という言葉で説明していた。つまり、人の本質は霊と肉からなるものであるが、理想的な人の生活というのは人間のこの肉と、霊という二つの面を調和的に自然に向上、発展させるところにある。

当時ヨーロッパ大戦直後の澎湃として全世界を覆っていた平和思想、人類愛思想に敏感に共鳴した周作人は「人的文学」を書いた。文章発表後、直ちに当時の社会では大きな反響を呼び起こした。それによって文学芸術の分野に新風を吹き込み、文学界の迎える局面を一新した。明瞭で通俗的な社会文学を建設せよなどのスローガンを掲げて、正式の文学革命の旗が打ち立てられた。

又、周作人は「人的文学」「平民文学」などの論文を続けて発表することにより、中国の文学革命を広い範囲で深くまで導いた。周作人は文学革命はただ言語の形の改革だけではなくて、内容を新しく改革しなければならないと提唱した。それがつまり「人的発見」という内容である。「われわれは新しい文学を提唱すべきで、簡単に言えば、人的文学である。排斥すべきなのは非人的文学である」と周作人は言った。新文学はその形式内容とともに旧来の殻を打破しなければならない。そのために古典の引用、大げさな昔言葉、対句などを用いることをやめ、俗字俗語を避けず、白話すなわち口語をもって詩語を作り、文学というものを講ずべきである。また人を模倣せず、いたずらな表現を廃し、真の自己の思想感情の充実した、文学を作るべきであるといった意味の新文学だと考えられる。

ところで、「ヨーロッパは人間の真理の発見によって、はじめて宗教改革と文芸復興の運動を起こした。二回目はフランス革命にも影響を与えた。しかし、この人的発見の力、人的発見の理論の中核は人道主義である。」と周作人は指摘した。周作人は人的文学論によって文学という分野から人道主義を提唱しようとした。

五・四時期の周作人はその文学作品に人道主義を強調し、人生のための文学を主張し、弱者、子供、女性、貧乏人、圧迫された学生を味方につけ、侵略された民族感情に共鳴し、封建主義を反対していた。また人道主義の立場から人権論を主張した周作人は「人間のすべての生活の本能がみんな美しいものであり、優しいものであるからには、完全に満足を得るべきで、人間生活に違反する不自然な習慣制度はすべて排斥し、改めなければならない。彼の描いた「理想的な人間生活」とは、物質面では人の力におよぶがぎり尽くす、人の必要に応じる態度を取る。精神の面では、非人道的、或いは人力以上の古い礼法を取り除かなければならない。人々に自由のある本当の幸せな生活を送らせようと主張した。

新しい自由と新しい節制が必要とする中国の、新文明を建設しようとする周作人のこのような主張が当時反封建的な民主革命の発展に求められた要求と一致したものではないだろうか。周作人が取り出したのは、ヨーロッパでは何世紀か前に既に新興ブルジョアに使われたもので、外国の一部分のところすでに古くなった、遅れたものであったが、周作人は中国の実状を見て、実にそれらをうまく結びつけて、創造的にこれらの「武器」を使い、その良さを生かして、自己の理想の実現を測り、且つ実践したものである。

文学が人道主義を基にして、人生の諸問題を研究しようとする考え方のもので、人民の正当な生活を発展させ、精神と肉体との一致する生活を送らせようという周作人の文学主張は当時、人を束縛し、人の個性を殺す中国封建文化に力強く一撃を与えた。新文学運動のスローガンとする「人的文学」を樹立したのは周作人であった。以後、「人的文学」論は多くの作家の創作と翻訳の指導的な存在となる。むろん、周作人自身の文学活動の主旨にもなった。

又、「人的文学」の中で、周作人は人道主義は「個人主義の人間本位主義」だと指摘した。彼が重視したのは人道主義と個人主義の統一性である。当時の中国がまだ半封建的な国家であったので、やはり、個人の価値観は封建の束縛から解放されない、独立が重視されない、本位論から人生と人的価値に対して論議してこそ、民衆の中で、広範囲にわたって個人と人道的な観念を樹立することができる。であるから周作人の個人主義人性観念はすこしばかり現実と離れる面があるし、抽象的なもののように感じる。しかし歴史発展の理性要求に符合するかもしれない。それが、反封建主義の啓蒙運動の中で、積極的な役割を果たしたと私は思う。

周作人は人道主義の立場、個性解放の考えの立場から、社会を批判する文章をたくさん書いた。これらの文章は力強く、封建的な倫理観念と禁欲主義を批判した。周作人は大胆に男女愛と男女の性生活、女性解放、児童教育に関心を注ぐべきなどのことを書くことを提唱した。それが新しい文学世界にはまた新しい出来事だったと言えるかもしれない。

周作人は文学理論上では主張を持ち、影響もある作家で、後に彼は関係ある文章を一冊の「芸術と生活」に編集して、一九三一年に群益書社により出版し、中華書局により再版した。

周作人は中国新文学史上に於いて業績の最も優れた散文家の一人であり、独特の風格を持つ作家であった。中国新文学史上極めて重大な貢献をなしたと言えるものではないだろうか。

湯 麗敏

#### 参考書類

- 周作人散文集（第一、二、三、四集）中国テレビ、放送出版社  
周作人先生のこと 光風館  
周作人 伝記的素描 松枝茂夫 中国文学第六十号  
知堂回憶録 香港  
周作人論 錢理群 上海人民出版社